

主よ、信じます

ヨハネ 9 : 1 - 38



司祭 ヨハネ 井田 泉

2014年3月30日 奈良基督教会にて

2017年3月26日 西大和聖ペテロ教会にて

一人の人の主イエスとの出会いの物語です。生まれつき目が見えなかったその人は、ある日イエスと出会いました。そこから新しい人生が始まります。

彼はエルサレムの町で、座って物乞いをして暮らしていました。

ある日、いやな言葉が耳に飛び込んできました。何度も何度も聞いてきた言葉ですが、それを言われるたびに苦痛がのしかかってきます。

「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」ヨハネ 9:2

自分が目が見えないのは罪のせいだと言われ続けてきたのです。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためだ。」 9:3

びっくりしました。ラビと言われているこの人は、「罪のせいではない」と断言したのです。そのうえ「神の業がこの人に現れる」と確かに聞こえました。どういうことなのか、よくわかりません。目が見えず、物乞いをしているこの自分にも神の業が現れるのでしょうか。考えたこともないことでした。

そのラビ——聞いているうちにイエスという名前だとわかりました——が近づいてきて、泥のようなものを両目に塗りました。急に何をするのかと思うと、その人が自分にこう言ったのです。

「シロアムの池に行って洗いなさい」

不思議な力に動かされるように立ち上がって、シロアムの池に行き、言われたとおりに池の水で目をよく洗いました。すると目が見えるようになったのです。自分に触れてくれた暖かいイエスの手の感触と、彼の声の響きが今もはっきりと残っています。

戻ってきたとき、もうイエスはいませんでした。近所の人たちや何人もの人たちが自分を指さして言っています。

「これは、座って物乞いをしていた人ではないか」

「いや違う。似ているだけだ」

ここははっきり言いましょう。

「わたしがそうです」

「どうしてお前の目は開いたのか」と聞くので、イエスという人が言うとおりにしたら見えるようになった、と言いました。

「その人はどこにいるのか」と聞かれましたが、わからないので「知りません」と答えました。

すると、人々は自分をファリサイ派の人々のところに連れて行きました。ファリサイ派の人たちはまるで尋問するような態度です。

ちょうどその日は、働いてはいけない安息日だったのです。ファリサイ派の中には「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者もいれば、「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいました。

「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はあの

人をどう思うのか」と問われました。

思ったとおりに言うしかありません。

「あの方は預言者です」 9:17

イエスをとおして神の声が聞こえると確かに感じたからです。ところが、そう答えたとき、冷たい空気が広がってくるのを感じました。イエスのことを肯定的に言うのはまずいことだったのです。けれども自分としては、たしかにイエスは神から来られた方だと思うので、偽らずに言っただけです。

とうとう自分の両親が呼び出されてきました。両親が追及されているのがわかります。

「わたしどもは分かりません。本人にお聞きください。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう。」 9:21

両親は、自分たちの身を守るだけで精一杯のようです。

あらためてファリサイ派の追及は厳しくなってきました。再び彼は呼び出されてこう言われました。

「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。」 9:24

自分のことを「罪ではない」と言ってくれたのはイエスが初めてです。そのうえイエスは、自分の目を見えるようにしてくれたのです。そのような恩人であるイエスを、どうして「罪ある人間だ」などと言えるのでしょうか。

彼はファリサイ派に反論し、「あの方は神から来られた方だ」とはっきり言いました。するととうとうファリサイ派は「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」と罵倒する言葉を浴びせて、彼を追い出してしまいました。

追い出したというのは、単にその場から追い出したのではなく、もう二度と会堂に行けない。礼拝に集うことを禁じられ、共同体から閉め出されたということでした。

せつかく目が見えるようになり、自分のことをほんとうに大切に思ってくれる人と出会ったのに、その人のことを悪く言わなかったお陰で、彼はまったくの孤独と孤立に追いやられてしまったのです。

もう一度あのイエスに出会うことができればどんなにいいでしょうか。思えば、この生涯においてほんとうに自分を肯定してくれたのはイエスが初めてだったのです。イエスをとおして神の生きた働きに触れたのです。見えるようになった目はイエスを探すのですが、この広いエルサレム。会えるあてはまったくありません。

ところが、彼が追放されたことをイエスは聞いて、彼のことを心配して探しておられました。イエスを探している彼と、彼を探しているイエス。イエスは彼を見つけられました。彼は肉の目で初めてイエスを見ました。心の目もイエスを見たのです。

イエスは、彼のうちに起こっている思いをはっきりと感じられました。

「あなたは人の子を信じるか」 9:35

人の子とは救い主のことです。出会って信じて救われたい。彼は答えて言いました。

「主よ、その方はどんな人ですか。その方を信じたいのですが。」

9:36

「その方を信じたい」

もしかしたら目の前にいるイエスがその方ではないでしょうか。そうだったらどんなによいでしょうか。

「イエスは言われた。『あなたは、もうその人を見ている。あなたと話しているのが、その人だ。』彼が、『主よ、信じます』と言って、ひざまずくと……」9:37-38

彼はイエスに「主よ、信じます」と言ってひざまずきました。礼拝した、拝んだ、という意味です。

最初にこの人を見たときにイエスは言われました。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためだ。」

目が見えるようになったことも神の業です。しかしそれだけではありません。

自分の保身を図ろうとせず、イエスとの出会いを心から大切にし続けたこの人。脅迫に屈せずにイエスを信じて発言し、真実を曇らせなかったこの人。そして再びイエスと出会って「主よ、信じます」と告白したこの人。このようにして彼は確かな自分を取り戻し、真の信仰の人となりました。このこと全体の中に、神の業が現れた。この人にほんとうに神の業が現れたのです。

この人はイエスを自分の救い主として獲得しました。イエスはこの人を真実の弟子、愛する子として獲得されました。今後、彼は決してイエスから離れません。イエスは彼を決して見放されることはありません。

わたしたちはイエスを探しているでしょうか。

イエスはわたしたちのことも探してください。わたしたちを見出してください。

わたしたちにも、あの目が見えるようになった人の真心と真実がありますように。新しく主イエスと出会い、信仰を告白することができますように。わたしたちひとりひとりをとおして、神はご自身の業を現されるのです。

主イエスよ、あなたがわたしたちに出会ってください。わたしたちもあなたを信じたいと願います。わたしたちをあなたに対して真実な者にしてください。あなたと心を通わせる者にしてください。あなたを新しく信じて歩む幸いをお与えください。
アーメン